
VS **魔王**

塩々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VS 魔王

【Nコード】

N2622L

【作者名】

塩々

【あらすじ】

主人公、瞬輝またたきは人間。魔王の配下にいたけれど、極度のセクハラにたえられない…！
魔王を倒すべく、勇者ら一行に加わった。
強大な魔王の力に圧倒されながらも力を合わせて(?)進み続けるカオスファンタジー！。

苦手な方はご注意ください。

VS 魔王（対魔王戦01）

朝起きると、自分のベッドじゃないことが半分。

自分のベッドだけど、抱きつかれてることが半分。

いつの間にか服も乱されて、肩の辺りが寒くなって起きる。

凄く、嫌だ。

でも、それでも自分が仕えてる主人に暴力を振るうわけにもいれない。

俺の主人は「魔王」。

その強大な魔力を使って、俺を昏睡状態にして好き勝手している。

「瞬輝^{またたき}たん…そんなにされたら…」

寝言がー々キモいんだよ！

抱きついていて腕が身体を這い回る。
鳥肌がたった。

見た目は若いが、魔力で時間を止めているだけなので中身はただのキモイオヤジだ。
しかもガチホモ。

だから俺は目をつけられた。

好き勝手されてはいるが、幸いまだ掘られてはいない。

お互いの同意の上で愛し合いたいとかなんとか、いい歳のくせにキモいことほざきやがる。

だが、拒否し続けたとしても、男の脆い理性がいつまでも持つ訳がない。

本当に爆発する前に逃げ出さなければ、俺に未来はない。

ハッキリ言つて、魔王の配下辞めたい。

給料いい訳でもないし。

飯不味いし。

セクハラで訴えようとしても、魔王の配下じゃ相手にしてもらえない…。

ガチホモの餌食になる前に勇者が倒してくれるかどうかもアテにならない。

そうか、勇者か！

助けを求めよう！

俺は今日にでもこの仕事辞めて、勇者にガチホモ討伐してもらえようようお願いしよう！

ガチホモ倒したら公務員になろう。

「魔王様あ？瞬輝、お暇が欲しい…」

「辞めたい、というのか？」

お願いだから太股をなでないでくれ…！
つーか何だこの、俺だけ特注の絶対領域軍服は！？

「国に残してきた双子の兄弟が病気にかかって」

「一卵性か？」

聞くのそこ！？

気に食わないが、一応頷く。

「瞬輝さんが、二人…」

しまったそういふことがアアアアアア！！

早く、逃げなければ！

「お、おおお金は要りませんので失礼します！今までありがとうございました！」

走り出す、俺。

魔王が右手を俺に向ける。

向けた右手の指を鳴らす。

パチン

止まる、俺。

(く、そ…動けない…！？)

立ち上がり、側まで歩いてくる魔王。

「そう逃げようとするな。おまえの…瞬輝さんの考えなどわかって
いる」

「ですよね…！」

声だけはでるようだ。

「逃がさない。私の物だ」

「そんな悪役セリフ吐いてると勇者来ますよ！」

そんな都合のいいことあるわけないけど、もう何も思い付かないと、魔王の長い耳がピクリと動いた。

「勇者が来た、だと…!？」

「冗談ですつてば…」

「冗談じゃない、門が破られたぞ」

都合のいいことあったアアアア!

魔王は自分の城を意識下で監視、管理できる。

これも強大な魔力のお陰だが、俺にとっては迷惑極まりない。

「じゃあ、早く…!」

(逃げないと!)

「そうだな。早く瞬輝さんの菊門をぶち破るとするk」「待てエエエエい!!逃げないと、でしょ!勇者に倒されるかもしれないんですよ!?!ガチホモしてる場合じゃないんですよ!!」

俺が叫んでる間に、動けない俺をベッドまで運ぶ。

ヤバい、本気で掘られる。

ピリピリと身体が痺れて動かないのは、微量の魔力を俺に注いでいるから。人間の俺には微量であつても効果は抜群だ。

重くないのか?

男一人を何の苦もなく持ち上げ運ぶこの男。

これも魔力のせいなのかは俺にもわからない。

「さあ…瞬輝たん、私と一つになるのだ」

瞬輝たん…て、言ってる自分は恥ずかしくないのだろうか…？
堂々とガチホモな奴にとっては些細なことなんだろうか？

ピリピリ魔力注入のお陰で、頭までまわらなくなってきた…。

きつと、俺はこのまま

VS 魔王（対勇者戦01）

俺が、全てを諦めて目を閉じた時。

そいつは、その名に恥じめ登場を果たす。

「魔王覚悟っ！！」

扉をぶち破り、大剣を振るい、燃え盛る炎のような勢いでやってきたその男は、間違いなく勇者。

しばらくの沈黙が続く。

口を開いたのは勇者。

「し…失礼しましたお邪魔しましたあ…！」
そそくさ出ていこうとする勇者。

「助けるよ！！」

ビクッと震える勇者の背中。

「これ！俺！襲われてるだろ！？勇者なら、助けて…くれよあ…！」

言葉の終わりは、聞き取れただろうか。

泣き声と混ざって、はっきり、伝えられなかったかも、しれない…。

「ふ、う…うづうづ…ぐす…」

「瞬輝さんの泣き顔そそるお」

「おまえはだまってる！」

魔王の言葉を一蹴。

視線を勇者に戻す。

涙がとまらない。

「もういい…初めから期待なんてするんじゃない…」

「……………」

目を、閉じた。

期待も、希望も、持っても意味のない、ゴミ。
捨ててしまえ。

魔王の息が顔にかかる程近付いた。

「んっ…」

重なる、唇。

(俺の、ファーストキス……)

奪われてしまった。

「瞬輝たん、口開けて……」

顎を掴まれて、言われた通りに唇を開く。
ぬるりと熱い舌が入ってきた。

「んうっ……」

嫌だ。

嫌だイヤだイヤだ……!

気持ち悪い。

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて……

嫌だよ……。

「やめろ……」

「ん?……まだ居たのか勇者」

唇を放し、剥き出しの不快感を勇者に向ける魔王。

「やめろ……その人を、放せ……!」

(え……?)

「邪魔をするのか、勇者」

「勿論だ。勇者だからな」

「これから初夜を楽しもうと思ったのだが……その前に掃除をせねばならんのか……」

「聞け。その人を放せ」

希望を、期待を持ってもいいのだろうか。

勇者は、助けてくれる……?

「そんなにも嫌がっているのに、気付かないのか? そんなにも涙を流しているのに?」

勇者は、自分の大剣の柄を握る。

引き抜くと、大きく息を吐き、それ以上に大きく吸った。

「俺は救う……! 困っている、美しい人を!」

「……………はあっ!?!」

今、おかしい単語が聞こえなかったか?

「瞬輝たんをおまえ程度に渡したりしない」

「俺は急いたりしない。まずはお友達か」「おまえもガチホモかよ
!!!」

勇者のふざけた言葉を、言葉の剣で両断した。
だが、そんなことはお構い無しに勇者と魔王はヤル気満々だ。

魔王は瞬輝の上から退けると、乱れた髪をかきあげ勇者と向き合う。
勇者は剣の柄を握り直す。

瞬輝をほったらかして、瞬輝争奪戦がいよいよ、始まる。

VS 魔王（対勇者戦02）

「うおおおおおおお！！」

叫び、大剣を振り上げ魔王に斬りかかる勇者。

瞬輝は被害を受けまいと、まだ痺れの残る体を必死に引きずる。

ズドン、

と、先程まで瞬輝が魔王に組敷かれていた場所に銀色に光る刃が突き刺さる。

「ひっ…！？」

もう少しでも動くのが遅れていたらと思うと、瞬輝の顔から血の気が引いていく。

魔王と言えば、いつの間にかベッドの脇に、いかにも「余裕ですが、何か？」と言いたげなムカつく笑みを浮かべている。

「瞬輝たんとにゃんにゃんするためのベッドに穴が空いてしまった…。穴は瞬輝たんにだけあれば良いのだ」

「いちいち言動が下品だよあんた！」

だんだんツツコミを入れるのにも疲れしてきた。

「うおおおおおおお！！」

いい加減、その大声と大振りの剣技は止めたほうがいいと思う。

勇者の剣は、ブンツ、ブンツ、と風を虚しく切るばかりで、魔王を掠りもしない。

とりあえず動かぬ体を懸命に動かし、乱れた服を直した瞬輝は冷静に尚且つ冷ややかな目でガチホモーズ（仮）の戦いを見ていた。

明らかにレベルの違う二人。

（これは…）

どんどん体力を消費していく勇者。

そろそろ限界だろう。

逞しい胸が、肩と同時に上下する。

おそらく勇者も気付いただろう、実力の差。

額に流れるのは冷や汗に違いなかった。

「逃げる勇者！あんたじゃ勝てない…！」

自分の無意識のうちに声を上げていた。

「当然。」とでも言いたげな魔王の顔がムカつく殴りたい。

それとは対称に、目を見開いてこちらを凝視する勇者。

「負けイベントだ…さつさと逃げなよ……」

悔しいのだろう。

顔を歪めて魔王を睨む。

「くっ…覚えてろ、魔王！必ずおまえを倒す！」

「それ、悪い奴のセリフ！」

ガシャンと大剣を鞘に戻すとダツシュ。

「えっ…！？」

ダツシュで駆け寄って来た勇者に抱き抱えられた。

瞬輝は自分の状況を確認する暇もなく、走り出す勇者の服にしがみついた。

「瞬輝たんっ…！」

「必ず、必ず戻って来るから…！」

（魔王、あんたを倒す為に）

「はあ…はあ…はあ、はあ…」

勇者は、瞬輝を抱き抱えたまま魔王の城を一気に下った。それこそ信じられない速さで。

城の門の前で、息を切らして立っている。

「あ、あの…」

この状況にいたたまれない気持ちで一杯になった瞬輝が口を開く。

「んっ…!？」

何の前触れもなく、唇を塞がれた。
突然の勇者の行動に、混乱する。

唇が離れたその時、思考回路が回復した。

パアアンツ

平手打ち。

決まった…!

勇者の左頬に手のひらの跡が赤く、くつきりつついた。

「最ッ低!」

「……………」

勇者は何も言わない。

言わないのではない、言えないのだ、と瞬輝が気付いたのは次の瞬間だった。

勇者の顔に流れる一筋の赤。

「は、鼻血…!?!?」

「魔王の気持ち、良くわかった…」

「わからんでいいっ!いいから放せ変態!」

暴れていると、向こうから勇者を呼ぶ声が聞こえた。

勇者のパーティーらしい。

VS 魔王（対仲間戦01）

「ゼス…！」

（ヒロイン…？）

やたら可愛い女の子が駆け寄ってくる。
この勇者はゼスというらしい。

「一人で魔王に挑むなんて何考えてるの！？」

（ああ、イベントの途中か）

「すまない…つい、カッとなって…」

勇者、ゼスが謝ると、ヒロイン風の女の子はため息をついてから困ったように笑う。

「ゼスらしいわ。でももう無茶しないで？仲間なんだから信じてよ」
瞬輝とゼスは、女の子の後ろに待機していたメンバーに目をやる。

「ところで、そっちの人は？」

ヒロイン女子が瞬輝を見てゼスに問う。

「ああ、この人は魔王に襲われてたから助けたんだ。綺麗な人だろ？」

ピクリとヒロイン女子の形の良い眉が動いた。

「ふうん…。私はディレット。あなたは？」

「ま、瞬輝…」

舐めるように観察されている。
明らかに敵視されている。

「負けないから…」

隣のゼスには聞こえないような声で瞬輝を脅す。

それから、しばらく歩いて魔王の城から随分離れた丘に着く。
一人一人メンバーを紹介してもらった。

まず、勇者ゼス。

金色の短髪に、体格のいい身体。

背中には赤く長いマントに、大剣を吊るす太いベルト。

いかにも王道勇者様だが、油断はできない。

そしてヒロイン、ディレット。

長い桜色の髪を、一つに結び上げふわふわと広がっている。

同じような桜色のブラウスに、明るいブルーのリボンを通して、
口
ーズピンクのボレロを羽織っている。

魔導師のストーリア。スカイブルーの鮮やかな髪を持つ、グラマーな女性だ。

黒く長い布を腰に巻いて、金や銀の飾りで留めている。

長い足を惜し気もなくさらし、膝から下をインディゴのブーツで覆う。

残念ながら豊かな胸は、短いローブに隠れて見えない。

格闘家のアルデバラン。

やたら体格のいい男だ。

日に焼けた褐色の肌が健康的だ。

上半身は胸から上には布はない。

腹にはサラシのように薄い布が巻かれている。

両手にはゴツい革のグローブ。両足にも同じようなゴツいブーツ。

治癒術師の官座^{かんざ}。

透けるような薄い緑色をした髪を持つ少年だ。

白いポンチョには青い刺繍。

そのポンチョは体に合っていない。そのため、上半身はおろか、後ろは脚も隠れてしまう。

改めて紹介なんてしてもらったが、瞬輝の想像していたよりもマシなメンバーなようで、胸を撫で下ろした。

ただ心残りなのは、ガチホモ勇者と、何故かライバル視するヒロイン。

それから、さっきから何か考えているのか凝視してくる官座少年だった。

VS 魔王（対少年戦01）

「今、瞬輝って言ったよな？」

このメンバーの中で最年少であろう少年が話しかけてくる。

「うん？俺は瞬輝、知ってる？」

「双子の薬師っておまえか？」

じつ、と真剣な顔で尋ねてくる官座。

「……そんな、薬師なんて言われる程じゃないけどね」

知っているなら仕方がない。

問われてしまえば答えるしかない。

少年以外の仲間は知らない様で、不思議そうに瞬輝と官座の会話を聞いている。

「兄は天使、弟は悪魔…そう聞いている。瞬輝はどっちだ？」

そんな話は聞いたことがない。

自分たちが言いふらした訳ではないのに、噂には恐ろしい脚色がついていた。

「確かに、俺たち兄弟は人の病気を治すための薬を作ったり、逆に殺したりもしてきた」

仲間の顔色が変わる。

それに気付いて誤解を解くため話を付け加える。

「俺たちは別に殺人鬼じゃない。賞金稼ぎだ。無差別に殺しちゃいない」

その容姿からは想像できない、したくもない単語が飛び出す。瞬輝にとっては、その容姿すら命を繋ぐ武器なのだ。

おかげで今回とんでもないことになったのだが…。

「俺たち双子は、どちらが兄で、どちらが弟か知らない」

「なぜ…？」

「親や家族まで俺たちの見分けがつかなくて、生まれたばかりの俺たちをあべこべにしてしまったんだ。全く、呆れた家族だよ」

「じゃあ噂は…」

「嘘…というより、変な脚色がついてるね…」

呆れた様に官座を見ると、何かを決意した瞳を瞬輝に向けている。

「何？愛の告白以外なら聞いてあげるよ」

横目で「ガチホモ勇者ゼス」を見る。

瞬輝の視線に気づいたようで、顔を赤くした。

「何で照れてんだよ!？」

ディレットにすかさず睨まれる。
ああ、疲れる。

「あの、さ…薬を教えてください？」

「薬を…？君は治療師でしょ？薬なんて必要ないんじゃない？」

「治療術じゃ、治せない病気や怪我也多い。でも薬は知識がないと使えない…。救えない…」

「薬にも限界があるよ？」

「恋の病は治せないぞ？」

ゼスが余計過ぎる口を挟む。

「根本的に破壊はできるんだから、調子に乗らない方が身のためだ
とおもっぞガチホモ」

コホン、咳払い。

「薬は、俺たちがやっているように人を殺す道具にもなる。君がそ
ういう使い方をするなら教えられない」

「救うためだけに使う」

官座の迷いのない返事を聞いて、瞬輝は微笑む。

「その微笑みを分けてくれ!!」

その時瞬輝は、ゼスにはいつか本当に毒を盛るような気がして怖かった。

とにかく教えることに関してはきつと兄弟の方が上手いであろう。

とりあえず「兄弟」の滞在している村まで送ってもらうことになった。

その話をきいてゼスは喜んだがまわりのメンバーが黙殺したためゼスは話の輪から一人外された。

これで少しは反省……

していなかった。

「瞬輝たん……」

「魔王と同じ呼び方するなよ!! 気持ち悪いな勇者!」

気持ち悪い勇者に後ろから抱き着かれたが、とりあえず振り向きざまに股間を蹴ってやったのでしばらくは立てないだろう。

ディレットに睨まれたが気にしないことにした。

VS 魔王（対魔王戦02）

「ああ、この村だよ。ここの空き家を一軒、滞在中は借りてる。煌輝はそこにいる…と思うんだけど」

村の中を家に向かい歩いて行く。

勇者一行が珍しいのだろう。道行く人が凝視し、振り返る。

村に入ってからほんの10分も歩かないうちにその家は見えた。

「あそこに煌輝がいる。手は出すなよ、ゼス」

振り返りゼスに釘を刺す。

言われたゼスは苦笑するものの返事はしなかった。

家のトビラが近付いてくると、突然、そのトビラが勢いよく開いた。

「瞬輝…!!」

「煌輝…!?!」

飛び出して来たのは瞬輝と同じ顔、煌輝だった。

だがその姿といえば酷く、上着は引きちぎられボロボロで、靴もはいていなかった。

ゼスの呼吸が上がっていたが気にしたら負けだと思って、蹴るのを踏みとどまった。

「どうした煌輝…ボロボロじゃないか…！」

「な…な、何なんだよ、アイツ…！」

「アイツ…？」

「突然家を訪ねてきて、『煌輝たん萌えWWW』て…！」

「まつ、待て…まさか…！」

一番思い出さたくない奴（ちなみに二番目はゼスである）の顔が頭に浮かぶ。

（いや、そんなバカな。

奴は城にいるはず…。

こんな所まで俺を追ってくるなんて馬鹿の所業じゃないか。

流石に奴でもそこまで馬鹿じゃ…

きつとアレだ、煌輝のファンだ。

どこで作ったのかは知らないが、ファンが押し掛けて煌輝を前にした感激が暴走して襲いそうになってしまったに違いない！いや、それもそれで困るけど！）

「ふむ…半分は正解か…」

突然、突如、唐突に、後ろから聞きたくない声ランキング第一位の
声が出た。

呼吸が止まりそうになる。

否、止めたくなる。

「やっぱり魔王…！」

「何なんだよ、こいつ！右上の毒が効かないなんておかしいだろ！
？チートだ、チート！」

「当たり前だ、煌輝！こいつ、これでも魔王だ！」

涙目ですがみつく煌輝に言う。

勇者であるゼスが、鼻血を垂らしながらではあるが魔王と二人の間
に割って入ってくれているので、ひとまずは安心だ。

だが、魔王の城の時から、そうレベルも上がったわけではないので、
長くはもたない。

仲間は全員、状況を飲み込めていないようで、呆然と突っ立ってい
る。

「ま、おう…？」

「そう、魔王。ごめん、煌輝…俺がしくじったから…」

「あ…あれが、魔王…」

「セクハラ…いや、パワハラに耐えられなかった…ごめん、逃げた…」

絶対領域軍服の瞬輝、ダメージ衣装＋裸足オプシヨンの煌輝が、同じ顔で魔王を見据える。

ピリピリ魔力注入を受けているわけではないのに、足がすくんで動けなかった。

「そんなに見つめられたら…ブッフ…！」

最後の「ブッフ…！」は、ダメージを受けたのではなく（細かくいえばダメージだが）、魔王の鼻から赤い液体が噴き出したためである。

ゼスと魔王、二人の足元には赤く生々しい血の水溜まりができていた。

いつの間にか、ゼスの視線も瞬輝たちを向いていた。

辺りはしん…と静まり返っていた。

先程までは居た村人たちは、村人A、Bを残し、全員姿を消していた。

静まり返った村で、一番始めに口を開いたのは魔王。

「ふむ…沢山の人々の前で公開3Pでもしようと思っていたのだが…これしか居ないのなら仕方がない」

「とことん変態だな！」

それでも、興味が削がれてくれたなら大歓迎だ。さっさと眼前から消えてくれ、と願う二人。

「また会おう、我が花嫁達…」

そう言うと、魔王は血溜まりを残して風のように消えて行った。

「何なんだよ、アイツ…」

煌輝は、放心状態で同じ言葉を繰り返していた。

VS 魔王（対勇者戦03）

「うっ…うっ…」

泣いているのは煌輝。

その側で慰めているのは瞬輝。

「仕方ないって、俺だってそうだった」

「クソ、マジ氏ね魔王…ただでさえ収入不安定なのに…！」

煌輝はキレ気味に言う。

「一番高価なのに…！なんで半分も使ったんだよ俺！」

ガツンと机を叩くと、まあ、机が古い事を証明するような何とも言えない鈍い音がする。

「あれが、どれだけ高価で…どれだけ貴重か…」

二人は薬を棚に効果の高い順に右上から並べておいてある。もちろん、効果の高い薬は高価で貴重だ。後悔の溜め息、怒りの溜め息。

「ならば…」

さっきまで黙って大人しかったゼスの手が、煌輝に伸びる。当然、煌輝に触れる前に瞬輝に叩かれるのだが（もちろん、変態菌が付きそうで気持ち悪いので素手で叩いたりはしない）。

「や、採りに…いつて来ようかな…って」

「確かに…材料さえあれば俺達二人で作れるけど…」

「それなら採りに行く…！」

「ちょっと、ゼス！？そんなことしてる暇があるの！？」

「…RPGっていうのは、案外暇ばかりなんだ…って」

ディレットの言葉に、本人に聞こえないようそっぽを向いて瞬輝が言った。

「で、煌輝、なんで俺たちまで出かける準備しなきゃなんねーの？」

「そりゃ、瞬輝、俺たちが付いて行かなきゃどの薬草が分からないだろ？」

「そつ、そりゃそつだけど…！でも、やっぱ…危険だって！（いろんな意味で）」

何やら兄弟喧嘩が始まってしまつ。

今回は、たまたま材料の採れる場所の近くだったため、瞬輝煌輝兄弟が付いていくことになった。

瞬輝は不満げではあったが、煌輝の説得の上、ポジティブに考えてみた。

（これが終わったら漢検とるんだ…！）

ガチャガチャ…
何やら瞬輝が棚を物色し始めた。

「…あつた、これだ」

興味を持ったゼスが、溢れるニヤニヤを隠そうともせず近づいてきた。

「勇者宛のラブレター？でも君たち二人以外からのものは受けとれない…」

か　ちやり

「ちょっとデカくてハデだけど、おまえの軽い頭ブツ飛ばすには十分だろ」

瞬輝がその手に握り締めたものといえば、銃。
それも、ハンドガンだが大きめな、とても実用的とは言い難い代物だった。

「M500。リボルバー式では最強で有名だよな」

周りのみんな（煌輝除く）は全く話についていけない様だ。

勇者に銃を突き付けられているのだ、顔を青くする者も居る。

が、

突き付けられている張本人、勇者ゼス、息を切らしていた。

「っ、…はあ、はあ…はあ…ま、瞬輝…これ、スツゴく興奮する…」

銃を突き付けられて興奮する勇者を、本当に勇者と呼んで良いのだろうか？

むしろ魔王では？

実は魔王が勇者に化けているのでは？

「はあ、はあ…もう、オレのマグナムが暴発し、そのまま永眠しろオオオオオオオ！」

間近で勇者のオーラ（ここでは「キモーラ」とでも呼んでおこうか）を受け、動けなくなっている瞬輝の代わりに煌輝がゼスのマグナムを蹴り上げる（作者の友人にもやたらマグナムと連呼する人がいる）。

この兄弟は人を蹴るのが上手い。

周りの仲間は目を背けた。

これ以上自分達の勇者の株を下げたくなかったのだろう。

気絶したゼスに駆け寄り寄るディレット。

「ちよ、何してるの…!?!」

「うん?ちよっと虫が…」

瞬輝と同じ顔で、固まる瞬輝とまるで正反対の笑顔で言う。

魔王とは違う「虫」が。

違う、コイツ、魔王とは違う。そう瞬輝は確信した。

勇者「ドM」だ

VS 魔王（対昔話戦01）

今から約2000年前、この国にはそれはそれは美しいお姫様がいた。

そのお姫様の住む、大きく真つ白なお城の裏には、大きく真つ黒な森があった。

真つ黒な森には魔女が住んでいて、不気味な森に魔物を飼っていた。

魔女はお姫様の美しさに嫉妬して、ある日魔物を使ってお姫様を誘拐した。

誘拐したお姫様を、森の中の大きな湖の底の魔法で作った部屋に閉じ込めた。

お姫様は出られなくなってしまった。

魔女はさらに、その湖からお姫様が出てこないように、大きな青い竜に見張らせた。

あとは、お姫様が醜く朽ちるのを待つだけだった。

魔女は、そろそろ良いだろうという頃合いに、部屋の中を覗いてみた…。

だが、そこにあったのは、醜く朽ちたお姫様ではなく、ましてやそ

のままのお姫様でもなかった。

部屋の中は湖の水が入り込み、部屋の壁をツタが覆っていた。部屋の一番底をよく見れば、真珠の様に輝く、白い小さな葉が生えていた。

魔女は、薄気味悪いと思いつつも、その美しい葉をむしり取り、家へ持って帰った。

そしてその葉を乾燥させ、お茶にして飲んだ。

『どうだ、お姫様。自慢の美貌もお茶にして飲めば大したこと無い…』

魔女は悦に浸った。

その葉がお姫様だという確信も無いのに。

そして魔女は苦しむ自分に酔ったまま、死んだ。

2000年経った今でも、湖には、お姫様が朽ちるのを待つ竜が住んでいるという。

「っていう伝説が残っていてね」

「怖いね、瞬輝…」

「官座は怖いの手？」

「別に…。ただ、それが現実の話だったなら恐ろしいな、って」

目的地に向かう途中に、求める薬にまつわる伝承なんかを、瞬輝はみんなに話した。

「でも…」

口を開いたらのはストーリーア。

「そのお話しの話になったことはあつたんじゃない？」

ほら、と指差す方には真っ白な大きなお城が見えた。
もうすぐそのお城の城下町だ。

『アスプロ』

この町の名前。

昔話に出てきたようなアスプロ城の城下町だ。

昔は中々に栄えていたらしく、家々の造りもしっかりとっていて、
道も整備されて歩きやすい。

町の中心部の道には、両脇に店もならば、賑わっている。

ここなら何かしら詳しい情報やら、地図やら手に入るだろう。

まあ、情報収集を兼ねて皆別行動をとることになった。

集合時間は一時間後。場所は中央広場噴水前、だ。

「煌輝、どうする？」

「とりあえず道具屋でも見て回ろうかな。瞬輝も、だろ？」

「ああ、もちろん」

ついでに薬草についての詳しい知識も補充できたら。

流石に魔王でもこんなところまで追っては来ないだろう（そう思ってもこの前は待ち伏せられたが）。

「……でも、魔物はたくさん放されてるんだよな。魔王のせいでのこの町には魔物の影響は無いようだが。

この町に入る門は大きく堅かった。魔物の侵入を防ぐ為だろう。

「ん……？」

町を散策していると、煌輝が不思議な看板を見つけた。

「お城のことならM S c a s t l e ……？」

「また凄まじく限定的なネタ使いやがって作者は……！」

早速使いたかったんです。忘れないうちに。

「ここに聞けば薬草のこと、分かるかもね」

瞬輝の叫びは虚しくこだました。

さて、お姫様は何処へ消えたのか……？

VS 魔王（対兄弟戦01）

「ッシャアアアアアっ！！キタコレ！ずっと俺のターン！」

とにかく嬉しかったようで、歓喜の声を響かせる煌輝。
周りに集まっていたギャラリーからも声上がる。

「コレを決めなきゃ男じゃないだろ……」

自分に言い聞かせるように呟く。

大きく深呼吸して、体に新しい空気を送り込む。
新鮮というには酒臭すぎる空気が体に染み渡る。

「……………high、だ」

煌輝の前にはトランプのカードのスペードの5。
それから、伏せられたもう一枚。
目の前にある伏せられたカードがめくられた。

そこに書かれた数字は……

「は、ち……………8！」

ワアアアアと歓声。

「やった……………！やったアアアア！20万、ゲットだぜ！」

両手を高く挙げ、涙を流して喜ぶ煌輝に、同じ顔が近付いてきた。

「はいおめでとー（棒読み）。帰るよ、そろそろ時間だ」

「えーっ！」

悔しがる煌輝と、呆然と立ったままのギャラリーを置いて、瞬輝はさも事務的に「換金で」と、係の男に言い渡す。

金の入った袋を受け取ると、そのまま振り向きもせずその賭博場から出た。

（こんなハズじゃなかったのに…！）

さかのぼること数十分。

「情報が欲しいなら、やっぱり下層だよな」

「定石通り酒場に情報屋なんかいればいいけど……」

定石といえば、下層に来ればガラの悪いDONに絡まれるとか良くある話。

「なあなあネエちゃん……」

ニヤニヤ嫌な笑みを浮かべた頭悪そうな数人が……て、うん？ネエちゃん？

「っちつげーよバカ!!!」

二人でキレた。

「あ？オマエらの目は何の為にしている？飾りか？飾りなのか！それにしてもずいぶん質素な飾りだなあ、おい？」

煌輝が一番手近なチンピラAに向かって言い放つ。

「それともここでは男をネエちゃんと呼ぶのか？そうなのか？そうならそうって言うてくれよネエちゃん？」

瞬輝もまた声をかけてきたチンピラBに言う。

二人とも、こういう輩が大嫌いだ。

それに加えキレやすい。

作者の妹並にカルシウム不足だ。

ニボシをたべなさい。

まあその後双方激昂の極み、殴る蹴るの鬪争な訳だが、殴る蹴るのはチンピラの方で、双子は避けるだけ。

反撃しないのは同罪にならない為になんかじゃなく、単純に暴力が苦手なだけだ（あれだけゼスを蹴っておいて何を言うか）。

「っ、おい瞬輝……!!」

「ああ、煌輝っ」

初めからずいぶんと劣勢な双子はついに逃走を図る。

「キヤアアア！たーすーけーてー！！」

「怖い人たちが追ってくるうっうっ！」

甲高い声を上げて走り出す。

ギョツとしたのはチンピラたち。

駆け込んだのが賭博場だった。

駆け込んだ場所が良かったのか、人が大勢いて、チンピラからも上手く逃げ切った。

これだけ人がいれば情報もそれなりに手に入ると思った

「俺が間違いだっただけ……」

その後は言わずとも今章文頭なわけで、魔王やゼスは出てこなかったが思わぬ伏兵（煌輝）のおかげでただの道草になってしまった。

「煌輝を信じた俺の目は節穴か、いや……飾りか……」

自分も少し楽しんでたなんて、誰にも言えない。

もう一つ、換金した金の入った袋を鞆の底に押し込めた。

VS 魔王（対騎士戦01）

「あ、ストーリーアさん、アルデバランさん」

集合場所である広場へ行く途中、少し細い道に入ったところでストーリーアとアルデバランに出会った。

「あら、戻る途中？」

「どうだ、良い情報は見付かっただろうか？」

「あー……、ははは」

アルデバランの問いにはもう笑うしかない。

「その様子だと、上手くはいかなかったみたいだな」

ハハッ、と笑い双子の頭を大きな手でわしゃわしゃ撫でた。

（お父さん……！）

ほんの少し、5分ほど歩いて広場へ着く。

みんながもう集まりかけていて、待つこともなく全員が集合した。

「全員、揃ったみたいだな」

ゼスがメンバー一人一人を確認して言った。

「よし、それじゃあまず、あの古城へ向かおう」

「待つて、ゼス」

ディレットがゼスの言葉に反応した。

「いくら地図を手に入れたからって、何の準備も無く森へ入るのは危険よ」

「大丈夫、ガイドを用意したんだ」

ゼスはいかにも勇者らしい爽やかな笑顔をしてみせた。

「初めまして、僕は仁^{ひと}。ここから古城^{しじょう}経由で湖まで案内するよ」

仁と名乗った人物は、門で待つていた。

銀髪に黒のメッシュ。左目の眼帯。そして整った顔立ち。

「傭兵のふりなんかをして各地の情報を集めてる。これでも王国騎士団に勤めてるんだ」

そう言って王国騎士団員の証である銀色のエンブレムを見せる。確かに王国騎士団員のようだ。

「僕は他の「トコ」からの出張なんだけど、よろしくね」

「？」

「ん、それじゃあ案内するね」

道無き道を進むようで、やたらと足が疲れる。

昔は道があったそうのだが、魔物が増えたお陰で通る人がほとんどいなくなり、手入れされなくなってこの有り様だ。

「それにしても……」

仁の後ろを歩くゼスが言う。

「強いな」

魔物が、ではなく仁が。

出てきた輩は片っ端から地面に叩き付ける。

腰に下げたレイピア（細身で軽い刺突に特化した片手剣）は、手に持ちもせず、見た目の派手さと相まってただの飾りだ。

「騎士だも、んっ…と！」

左側から飛びかかってきた獣に勢いよく蹴りを入れる。

なんとも嫌な音とともに茂みへ飛ばされ、それっきり戻ってこない。

「うん、ほら、もうすぐ着くよ」

白い古城がだんだん近付いてきた。
遠くで見たら、白亜の綺麗な古城だったが、近づくにつれ、その城の時代の流れを感じさせる痕^{あと}が見えてくる。

「そう言えば、何で皆はあんな所へ行くの？今時冒険者の人でもほとんど近寄らないよ」

「ああ、それは俺たち双子が……」

「薬草を補充したいから協力してもらってる」

「ああ、あの薬草ね……」

拳を熊のように巨大な魔物にめり込ませながら言う。

「メリケンサック（ナックルダスター）の一種。拳にはめて打撃力を格段に上げる武器）……」

倒れゆく魔物を目で追う官座がぼそりと呟いた。

「あの薬草は採る為にボス倒さなきゃなんないよ？」

「昔話の青い竜のことか？」

ゼスがぼーっとしながら倒れた魔物を見て言った。

「そんなボーツとしてたら全滅しちゃうよ？強いんだから、竜」

「ボーツとしてたんじゃなく、考え事してたんだ。結婚式のことと

k「すみません、そいつ叩きのめしてください」

「さあさ、着いたよ」

アスプロ城にたどり着けたのは、もう日も傾いた頃だった。町からそんなに距離が離れているわけではないが、何分魔物が多かった。

「今日は大所帯だったお陰か、少ない方だよ」

とは言え、登り坂続きの道と、魔物に飛び掛られる恐怖と、ゼスのせいで肉体的にも精神的にも参ってしまった。

「今日はここで泊まりね。暗くなると慣れない人にとっては危ないし」

「え、ここ？」

官座が思わず聞き返してしまった。

「大丈夫、大丈夫。僕は毎日寝泊まりしてるし」

「ここで？一体何のために……」

煌輝が辺りを見回す。

特に変わった様子は無い。

ただの白い古城が建っている。

先程は気付かなかったが、どうやら門を抜けて入ってきたらしい。

木々が邪魔して門が確認できなかったようだ。

「ここ一帯、魔物の大量発生が起きてるからさ、その調査に派遣されてるんだ」

ああ、なるほど。

こんな騎士でも仕事はしているのか（失礼極まりない）。

「あ、言い忘れてたけど、お城の中にも魔物は住んでるから気を付けて」

今日だけでいい、いい仕事、してください。

まったく、なんて死亡フラグの回収率が高いのだろう。

VS 魔王（対魔剣戦01）

「はぁ……」

溜め息をつきながら弱々しく部屋の扉を開けた。

「どうしたの？瞬輝」

同じ部屋で過ごすことになった官座が心配そうに見てきた。勉強していた手を止めて、瞬輝に歩み寄る。

「まさか、まさかさ……」

タオルで濡れた髪を乾かしながら話をする。

「浴槽でオタマジヤクシ、飼ってるなんて……！」

それは十数分前。

「あ、浴槽使えないんだけど……いい？」

「うん？シャワーだけ使えば構わないけど」

このアスプロ城に一晩泊まることになった。
なにせお城なもんだから、とてつもなく広い。
魔物だつて出る。

一人では危険なので仁に同行してもらいバスルームへ向かう。

「じゃあ僕はここで待ってるから、何かあったら呼んでね」

「ああ、うん、ありがとう」

「ごゆっくり……と、言いたい所だけどシャワーだけだからね。ゴメンね」

そこまでは良かった。そこまでは……

(立派なバスルームです、ね……)

流石お城と言うわけか。広々としたバスルーム。

所々、彫刻が壊れていたり、壁の装飾が取れていたりはあるが、それでも美しい姿を保ったままでいた。

浴槽も、使えないと聞いた割には目立った損傷も見られないし、むしろキレイなくらいだ。

不思議に思った瞬輝は、浴槽に歩み寄り中を覗いてみた……

「それはそれは恐ろしい有り様だったよ……。仁に言ったら飼ってるって。ホント、変な人」

「僕、浴槽覗かないようにするよ……」

そう言うと、今度は官座が入浴しに部屋を出た。

官座が座って勉強していた場所に、自分も腰掛ける。

「お、やってるじゃん……」

自分達のお古の投薬の書物、真新しい手帳。それに、ペンとインク。煌輝は瞬輝の想像以上に熱心な先生らしい。

呑み込みの早い優秀な生徒に、追い付かれるのも、そう遠くない。

全員が入浴し終わると、夕食の為に全員が集められた。

「ま、まともだ……」

思ったよりまともな食事で安心した瞬輝だった。

食事終わる頃、仁がとある話を始めた。

「バルムンクっていう剣を知ってるかい？ 俗に言う魔剣ってやつなんだけど。そいつはひたすら強いんだ。明日の戦いに持っていったら最高だね！」

「いや、そんな剣がひょいひょい出てくるものじゃないだろう。第一、俺は聞いたことない」

「勇者さまのクセに情報乏しいなあ。僕が持つてる、って言いたい

の！」

え？

「知り合いの天使ちゃん gave たんだけどね、僕には別に武器あいはつがあるからさ、ほつたらかしてあるんだ。だから、いる？有名な対竜用トラユンクス武器レニヤだよ」

その場がしん、と静まりかえる。皆話に付いていけないのだ。

「もらえるって言うなら……」

「ちょっと待ってー！」

ゼスの言葉をディレットが遮った。

「何か、おかしいわ。仁、あなた何か隠してるでしょうっ？」

じっ、と眼前に仁を見据えて彼の返答を待つ。

一方の仁は尚も変わらず微笑み続けていた。

「……鋭いなあ、お嬢様」

仁は椅子から立ち上がると、この部屋の入り口の近くに飾ってある大剣を指差す。

「これが、魔剣バルムンクだよ」

それなりの高さに飾ってあったのだが、蹴り上げて壁から外した。蹴り上げられた魔剣バルムンクは、そのまま重力にしたがって床へ落ち、ガラガラと滑ってから止まった。

「この中で一番体力値が高いのは……？」

仁がゼスに問う。

「……あ、アルデバランじゃないか？」

「じゃあ、お父さん（アルデバラン）持ってみてくれるかな」

「い、いやしかし……」

さすがのお父さん（アルデバラン）でも戸惑っている。明らかに仁の発言が怪しいのだ。

「大丈夫、死にはしないし痛くもないから。それに、ここには双子も官座くんもいるじゃない！」

ここでは皆気付かなかったのか、あえて言わなかったのかはわからないが、この場で一番HPが高いのは仁だった。

「っ……っ！」

覚悟を決めたアルデバランが剣に手を伸ばす。

「ここまで書くのに作者は一ヶ月かかったんだから、妙なことにな

「つたらタダじゃおかないから……」

ディレットがボソリと呟く。

呟いたはずだが凄みというか覇気というか、その場の空気を凍てつかせた。

「ちょ、ちょっと待って!! 妙なことになるから待って!」

仁が慌て出す。

作者は12/4現在年賀状と図書だよりと原稿に追われています。

と、まあ私情は置いといて。

「それを装備すると途端に具合が悪くなるんだ……!」

「ホント、ごめんなサイ……」

ディレットの前で正座をさせられている彼は、例のバルムンクを装備させられている。

「ホント、スミマセンデシタ……」

ぐんぐん下がるHP。

「ゴ、ゴメンナ、サイ……ゴメンナサイ……」

6000近くあったHPも300を切った。

「官座、はMPが無くなったから……」

ディレットがギロリと見回す。
目を反らすのは双子。

「双子、回復……！」

「もう、許してあげても……」

「そう、反省してるし……」

HPが尽きないように小まめに回復して正座させる鬼畜責めを続ける鬼のむすm(ry

おっと、作者は晩ごはんの時間だ。

「ふん、仕方ないわね。明日に響かないようにしてよね！」

自分でスタボロにしておいてよく言っ。

「うううん……」

「……大丈夫か？」

お父さん(アルデバラン)に抱き抱えられて運ばれる仁は、唇間とはまるで別人だったと、のちの双子は語る。

VS 魔王（対聖竜戦01）

「さあ、ドラゴン討伐、出発だな！」

今日もキモい勇者様は元気です。

それに比べて王国騎士様は具合が悪いようです。

「仁どうした？元気出せてー！」

ばしん！

「うつ……ぶ、うえおろろろ……！」

背中を叩いて出たのは元気ではなく内容物でした（お食事の皆様、大変失礼いたしましたm（――）m）

「何！？具合悪い！？」「

双子が同時に叫び、同時に駆け寄る。医者魂です。双子のシンクロ半端ねえ。

「……………」

「ああ、二日酔いか…………」

「二日酔いだな、間違いない」

双子の診断に迷いは無かった。

「で、ここが例の湖で間違いないのね？」

控えのメンバーであるストーリーリアが仁に問う。

「間違いないよ」

処方された薬により、多少元氣を取り戻した彼が同じく待機メンバーのアルデバランの背中より応答した。

さっきの「うっ……ぶ、うえおろろろろ……！」のせいで汚れた傭兵の服から、一新して騎士の服に着替えている。仮面で顔はほとんど隠れて口元しか見えない。

「ずいぶん拓けた所だな……」

「ずいぶん他とは雰囲気違っしな……」

辺りを見渡せば、先ほどまで歩いて（ほとんど戦闘だったが）きた陰湿で不気味な道とは景色が一変し、拓けて青空が覗いていた。

その青空よりさらに青い水が、一面に広がっていた。

「不気味な伝承とは大違いだな……」

辺りの薬草を四つん這いで漁りながら瞬輝が言う。

背後のゼスの気配に気付きながらも。

「瞬輝……触ってもいい」「おまえの頭をボールに見立ててキラ フ
イール 決めてもいいんだぞ……?」「」

瞬輝の背後のゼスの背後には煌輝が控えていましたとき、めでたし
めでたさ」「めでたくねーよ!!」「」

「……で、どうすれば良いんだ?」

双子からフルボッコと言ういつも通りの制裁（嗚呼、彼にとっては
ご褒美か）を受けたゼスは、アルデバランの背中の仁に問う。

「奴が来るまで待つんだ」

「待つって、当てもなく来たってこと!? あんた、やっぱりタダじ
やおかな……」

ディレットがキレかけたが、気にせず続ける。

「いや、罠を使う」

「俺、嫌だぞ」

まあ、なんというかこの中でも一番弱そうなのは自分だから（実際
の戦闘能力は不明）。

「君じゃダメだ、瞬輝」

奴には大好物がある、と、仁が今までで一番悪い笑みを浮かべた。

仮面でよくわからなかったが、きっとそうだろう。

湖の畔、一人ぼっちで薬の勉強をしているのは煌輝の愛弟子、官座少年である。

育ち盛り、ものの吸収の早い14歳の少年だ。

14歳ではあるが、実年齢よりも若く見られるであろう外見は、ほとんども外に出ずに勉強ばかりしていた為だろう。

白い肌、細い手足、若草色の髪、透き通る青い瞳……十分、美少年だ（作者好みの）。

「……………」

もちろん彼が囃です。

物陰では官座を除く全員が様子をつかがっていた。今回の戦闘メンバーは既に戦闘態勢に入っている。

「……………ホントにくるのか？」

「ゼス、君は顔に似合わず心配性だね。それでも勇者かい？」

「心配性もなにも一人で魔王の城に突っ込んできたのにな」

ぼそり。瞬輝が呟いた。

「瞬輝たんマジいいにおいした。てか泣き顔もう一回拝みたい」

聞こえたようだ。

「すみません騎士殿、そいつ突き刺しておいてください」

変わりました、官座。

「もし、その少年。道にでも迷ったのか？」

びっくうううう！

突然声を掛けられたので、思わずビビる。

(……………で、なんだ、人か……………)

さっきまで人なんて居なかったような、と不思議に思いながらも向こうに敵意は無いようなので、差し支え無い程度に受け答えする。

「いや、あの……………このあたりに珍しい薬草があるってきいて……………！
それで、えっと……………最近、薬の勉強始めたから……………」

「……………」

大柄の、髪の高い男性。

瞬輝よりも濃い青。例えるなら、この湖の一番深い場所の色。

目は金色で、鋭い。

服装、といえばゆとりのある前合わせの（要するに和服だが）、髪と同じような色調に揃えた荘厳なもの。

敵意は無いようだが、身長が高いのも含め、やはり威圧的だ。

ドラゴンの討伐に支障が無いか心配だが、メンバーが誰も止めに来ない。

さらに変わりました瞬輝。

（あの人……尋常じゃないくらい怪しい……！）

「……おい、仁……？」

「黙って、ゼス。武器を構えろ」

ただし、静かにと、付け加えた時には彼は茂みから一人駆け出していた（ただし、静かに）。

「くたばれシヨタゴン（シヨタコンドラゴンの略）……！」

罵声とともに斬りかかった。

VS 魔王（対聖竜戦02）

「……あ、おい瞬輝、コイツぁ地元で300Gの」

「お、ホントだ煌輝、採れるだけ採るぞ」

仲間が竜と死闘を繰り広げているその随分離れた場所で、双子は採取祭を繰り広げていた。

それはまあたくさんの収穫があった。

求めていた薬草も難なく手に入り、少々物足りないくらいだった。

「手に入れたい物も手に入ったわけだし…煌輝、皆に帰るって伝えるか？」

「うん、そうだな、瞬輝」

と、話を進める双子の元へ、ものすごい勢いで飛んでくる影があった。

「うああああああああああああああああああ…!!」

「!!?」

ソレがゼスだと気付いた時にはもう眼前まで迫ってきていて、反射

的に体を丸めることしかできなかった。

「うわっ…!?!」

「くうっ!」

「あゝっーだあああっー!!」

ゼスは双子に直撃こそしなかったものの、双子の近くの茂みに勢いよく突っ込んだ。

「ちよっ、ゼス大丈夫か？」

一応心配はしてみる。

彼も人間だ。医者ゼスの身として、怪我をしているなら放っておけない。「ああ、だいじょ…あ、いや、瞬輝たんがちゅーしてくれたら元気になると思う」

「はい、無事ですね（頭以外）」

「いや、待ってくれ瞬輝hshs!」

「どこも怪我してないだろ!みんな戦ってるんだから早く戻って…」

…

「信じられないくらい強いんだ。あの仁ですら余裕が無い」

そう言われてみれば、確かに随分と長引いているようだ。

「……俺たちの目的の薬草は見付かったから、逃走すればいいんじゃないか？」

「いや、どうしても仁が倒したいと言っから。どうも奴はただの竜じゃないらしい」

本来あちらに居るべき主人公が戦闘を放棄して話始める。

「それは戦闘開始直後 ……」

斬りかかった仁の大剣を、竜は素手で止めて見せた。

「なん…だと…!？」

何でもかんでも「なん…だと!？」で済まされるほど世界は甘くないんだぜ。

「シヨタコンではない。小さい男の子に興味があるのだ」

世界はそれをシヨタコンと言っんだぜ。

「我は聖竜タマユラ。竜の長であり、水を統べる者」

「聖竜!？」

仁が驚き飛び退くと、懐ふくろから何やらガサガサ取り出した。

「すみません、よろしければこちらにサイン頂けないでしょうか？」
取り出したのは何かの書類のようだ。

「いや、連帯保証人とか断ってるんで……」

「いやいや、そんな怪しいものじゃなくて、ただ帝国と契約しても
らえれば……」

「初めて会ったヒトと婚約も……ちよつと……」

まあ、そんなやり取りが数分の間続いた。
結果……

「ふむ……私の体力を半分まで減らせたなら契約してやるう」

「……と、そういう訳なんだ瞬輝。半分減らせばいいと言ったが、
流石聖竜と言うべきか、なかなかダメージを与えられない」

それどころか仲間が傷付き、疲弊するばかりのようだ。
とくに官座。

もちろん執拗に追い回されている。

「うーん……煌輝」

「瞬輝、まさか……！？」

またすごく白々しい演技で会話する双子。

「イケナイこと）ドーピング）、する？」

「え？」

「はい、じゃあ量計りまーす」

「え？いやいや、健全RPG的にはそついつの良くない……」

「黙れや。ダレが不健全RPGにしとるかよお考えてからモノ言わ
んとなあ、ワレエ？） 注：瞬輝たん）」

VS 魔王（対聖竜戦03）

「いや、あの瞬輝さ、ん…!？」

声が上がっている。

「勝手に興奮するのはかまわないけど、量計り間違えても責任とらないからね」

ピッタリとゼスに抱きついて、体の大きさを調べる。そこから配合する薬の量を決める。

「俺だって、こんなこと好きでやってるわけじゃないんだからな。ホントはしっかり体のこと調べないと危ないし」

細かくメモを取る瞬輝。

「え？そんなに危ない薬なの!？」

「……まあ、大丈夫だろ。モハンという鬼人薬みたいなもんだし」

はじめの間は気にしたら負け。

よし、分かった。

出来上がったメモを見ながら瞬輝と煌輝が手分けして作業をする。本業なのでほとんど時間はかからなかった。

「待つ、ちょ…注射？」

「大丈夫、痛くないから」

小児科医の魔法の呪文。

「えっ、痛くないの!？」

ゼス（…）

「「イラッ!！」」

思わず口に出してしまったようです。

「針が細かいし、量が少ないからな。あと何より俺たちの腕がいいからな」

「量ってどのくらいなんだ？」

時間を稼ごうと必死なゼスは、とにかくどうでもいいことをたずねた。

「メカニカルPPバンド一杯くらいかな」

「ん？テクニカルピーマン？」

「おまえの頭がピーマンだよ」

ゼスの空耳度が高くてあきれ返った双子のテンションはがた落ちだ。注射器を思わず落としそうになる。危ない危ない。

「メカニカルPPPバンド！要するに……」

「ナニソレカツコイイ」

「は？」

初めて新幹線を見た鉄道マニアの息子みたいなキラキラした目をするゼス。

「必殺技の名前にしていい？」

（（コイツ馬鹿だWWW））

「ああ、好きにしていいいから注射しような」

なだめて注射器を構える煌輝。
ゼスが動かない様に押さえる瞬輝。
鼻息が荒くなるゼス。

作業は、ほぼ一瞬で終了した。

「……まったく、世話かけさせるなよ」

「まったくだ」

「ところで、おまえたち……ゼスに何をしたんだ？」

「ん……？」

非戦闘メンバーの元に戻ってきてお茶をしている双子に、お父さん……もといアルデバランがきいた。

「なんだか、様子がおかしくないか？好戦的……と言っか、ハイになってるというか……」

要するに、なんかラリってイツちやってる感じです。

「……もともとあじゃなかったっけ？なあ、煌輝」

「……うん、もともとだよな？瞬輝」

「……やっと終わった」

この短時間で、先程見たよりもずいぶんとやつれた官座が、よたよたと戻ってきた。

「なんなのよ、あんなに強いなんて聞いてないわ！」

なんともボロボロになったディレットだが、文句を仁に浴びせかけている。

「あはは……強いつて言つてたよ、僕は」

こちらもズタボロだ。仮面が取れて、左目を手で覆って隠している。ゼスは……ラリっ……じゃなかった、興奮が治まったのか地面に突っ伏している。よかった。

「とにかく、みんな無事でよかったよ」

傷付いた仲間を治療しながら、話を聞いた。

「それにしても、仁でも苦戦するんだな」

座り込んでお茶をすする彼を見て、嫌味を言ってみる。

「んー……僕も人間だしね。言い訳するなら、相性が悪かったんだ。属性の」

「……よくわかんないけど、勝ててよかったな」

「ああ、君たちのお陰だね。護衛料案内料、これでチャラでいい？」

瞬輝自身は何もしていないので、これでタダになるのは嬉しいことの上無い。

「このこと帝国に報告すれば特別手当もらえるはずだから……もし帝国に来るようなことがあったら騎士団訪ねて僕の名前出してね。すぐ行くから」

さらにお金がもらえるらしい。この上無い幸せを感じていた。

次の瞬間までは……

VS 魔王（対魔王戦03）

ゾクゾクゾク……！

（嫌な予感しかしな）

「双子たんhshs」

「ほら！ほら出た！そろそろ来ると思ってたぜ！！」

神出鬼没にも程があるだろう、というくらい唐突に現れたのは、もちろん、ご存知あの変態……もとい魔王。

辺りに緊張が走った。

ただ、今まで魔王に会ったことのない仁だけが一人、その空気に取り残された。

「アレが、ヴァスターニエ（魔族の国）の王様よ。つまり魔王ね」

一番近くに居たストーリーリアが耳打ちして教える。

「へえ、アレが、魔王……」

「む……？」

仁の視線に気付いた魔王が、ひとまず双子から離れた。

「マズイ！魔王に近付くな……！」

「え、瞬輝たん心配して……？」

「オマエじゃねーよ！」

ふざけているのか、マジなのか、よく分からない魔王にワードソード（ようするに言葉の剣）でたたつ斬る。

それを愛の囁きと受け取って、なお魔王は歩みを進めた。

「その服装……」

（マズイ、ヴァスターニエと帝国は対立して……！）

「その服装……帝国の、書記官……か？」

（バレた……！ん？書記官てなんぞ？）

「赤だから……仁」

「うん、正解。魔王サマ詳しいね」

相変わらず顔の左側を隠しているが、官座が包帯を用意してくれたように、今まさに巻いている。

「生で見るのは初めてだ……。サインください」

おい、魔王のキャラが安定しないぞ。

「ま……おう、さま…へ（はあと）じ、ん。はい、できたよー！」

「どうしよう！サインもらっちゃったよ瞬輝たん！」

「アイドルのサインもらった女子高生みたいな反応するなキモい」

「あ、あと……スタンプを……」

魔王がなにやらゴソゴソと、二つ折りになった厚紙を取り出した。そこには、アフトラトリア帝国の国旗が描かれている。

「スタンプ……？ポイントカードか？」

中は幾つかのマスに区切られたいたって一般的なスタンプカードだ。スタンプは既に一つ押されている。

「二個目だね。お疲れさま、まだまだ頑張ってね！」

ぽんっ

スタンプが押される様子を仲間全員（ゼスを除く）で、ポカンと見ていた。

「見てくれ双子たん！もう二個も集めてしまったぞ！優秀な魔王だと惚れ直しただろう！」

(もともと惚れてねーよキモオヤジ)

とは口に出さなかった。

何故かって？あんなに嬉しそうな顔をしているからさ。

いつものように険悪な雰囲気にならないのは、ゼスが気絶したまま戻ってこないからだ。

別に薬の量を間違えた訳じゃない、きつと。

「ところで、それ、何なのよ？」

皆が気になっていたスタンプカードを指差して、ディレットが問う。

「これは、スタンプカードだよ。世界中バラバラに配置されている仲間、ようするに帝国でいう書記官の地位にある人たちを訪ねてスタンプを集めるんだ。あ、はい、代表でお父さんにもあげるね」

「聞きたいことが山ほど出てきたんだが……」

スタンプカードを受け取ったアルデバランは困り顔だ。

「っ……………!?!」

その頃、話のスミに追いやられたゼスが意識を取り戻した。意識の戻ったゼスの視界に宿敵魔王の姿が映る。

「出たな魔王……………!今日こそオマエを倒す!」

まだふらつきながら懸命に走り出す。震える足が小鹿みたいで面白い。

「げっ！こんな早くに目覚めるなんて……！？」

魔王も臨戦態勢に入る。バチバチと魔力の弾ける音がする。

「力の差が分からぬとは愚かな！」

「うおお！瞬輝たんから授かった必殺、受けてみる！」

「いや、授けてねーし！」

ゼスが剣を大きく振りかぶる。

「メカニカルPPPバンド……！」

振り下ろす。

（あいつ、マジで技にしたよ……）

ガキイイン！

渾身の一撃は魔力により弾き返された。

「ふ……、よく聞け愚かな勇者。メカニカルPPPバンドとは、ペットボトルキャップのことだ」

あたりには寂しく風が吹くばかりだった。

VS 魔王（対魔王戦04）

「っもっ食べられないってばー!!」

はっ……!?!?

「なんだ、夢か……」

沢山のサラダに囲まれた夢から目覚めた瞬輝。
フカフカのベッド、天井には妖精が川で戯れる絵が描かれている。
いつものように、魔王城のベッドで目覚める。

「……ん?」

魔王城のベッドで目覚める。

「いや、待て!なんでまた俺は魔王城に居る!?!」

「そんなの俺が聞きたい!!」

「煌輝!?!なんでおまえまで……」

気が付けば、隣にも同じキングサイズのベッドがあって、その上には煌輝が頭を抱えて座っていた。

「っついてねーよ……マジっついてねー俺」

「安心しろ、去勢はしていない。ちゃんとついでるぞ」

「ちっげーよ！そういうことじゃなくて！」

朝食のパンをかじりながら瞬輝は魔王にひたすら振り回されていた。一方の煌輝といえば、あまりのショックに食事も喉を通らない。無言で座っている。

「おい、ところで魔王、なんで俺たち魔王城こじに居るんだ？」

「ふむ、なんだか口が悪くなった気がするが心の広い魔王様は許してやるぞ。さっそく結婚式の段取りだが……」

「おい聞けよラヴィリンソス」

「名前で呼ばれた……！嬉しい！」

「……じゃあ、あの後俺たち二人を拉致して魔王城に監禁した、と」

「俺たち以外の皆は無事なんだろうな？」

煌輝も段々と落ち着いてきたようで、話せるまでに回復した。だがまだ魔王の顔は見れないようで、背中を向けている。

「さあ、どうだろうな。……ほんの少し魔力を撃ち込んだだけだ、人が吹っ飛ぶくらい」

「……」

ゼスはともかく、他の皆に何かあつては大変だ。しかもこんな魔王のワガママに振り回されて。

「申し訳なさすぎてもう顔合わせられない……」

「さあ、双子の為にオーダーメイドだ」

「……」

目の前に置かれたのは、ウェディングドレス。

「バカなの？死ぬの？」

「おい、下半身の布少ないだろ」

ウェディングドレス、なのだろうが純白ではない。

黒に近い青色で、生地は上等なもののように刺繍が細かく入っている。

「いや、一応魔王の結婚式だし白もどうかと思って」

なぜだか魔王がモジモジ照れている。

「さあ、着てみてくれ。きつとよく似合う」

「あのさ、まだ俺たちOKしてなくね？」

「それ以前に、男同士で結婚アリな国なわけ？」

「私が魔王である限り、私の国の法律は私が基準だ」

こんな国のトップは、不信任で降ろされればいいのに、そう思った
が口には出さなかった。

言ったところで、今の自分の状況が改善される訳でもない。

ドレスを見せられてから、かれこれ数時間が経過した。

瞬輝たちは試着を拒み、魔王から一時的に解放された。

この時間を利用し、とある人物との接触を図る。

魔王を撃ち破る為の強力な助っ人となってくれるであろう。

「たしか、いつもこの辺りに……」

瞬輝が以前魔王城に居た頃の記憶をたどり、その人を探した。

VS 魔王（対騎士戦02）

「相変わらず、魔王城まおうじょうの飯は不味い。なあ、瞬輝？」

「……なら食べなきゃいいんじゃない……」

「ところで、瞬輝とは細胞分裂で増えるのか？」

「双子です」

魔王城の食堂にて、探していた人を見つけた。

瞬輝が逃げ出す前にも、何度か危機を救ってくれた恩人だ。

「あの、セーベルさん……！」

「脱走の手伝いか？瞬輝一人でも大変だったのに……ええと、瞬輝？」

「煌輝です」

「二人してキラキラネームなのな。男二人はちと辛いな……」

彼女の名前はセーベル・リンヂス。
男勝りで男前で男顔負けの剛力の持ち主だが、女性だ（たとえ貧乳
だとしても）。

実は帝国の騎士でスパイらしい。

「初めからバレてたけどな」

「え？」

「魔王は全部お見通しだよ。分かかって放っておくのさ。それだけに自信があるんだろうよ」

「ナメられたものだ、と毒づく。」

食堂のメロンフロートをかき混ぜながら三人、重たい空気を作り出していた。

「そっいや、瞬輝……いつもの馬鹿デカイ銃、どうした？」

「……え？あれ……!？」

「連れ去られる前はあつたよな？」

魔王に、没収された……。

「取り戻さなくていいのか？」

「自分の未来と銃、どっちが大事かなんて比べるものじゃない。もちろん未来を選ぶべきだ」

「俺は瞬輝みたいになりたくない、処女喪失的な意味で」

「失ってねーから!!」

とりあえず、作戦を練るために一旦体勢を整える意味も含め解散し、部屋へ戻ってきた。

もはや魔王に対しては気休めではあるが、鍵を掛けて。

銃だけでなく、薬箱も取られたようで、ショックが更に大きくなる。

二人でテーブル越しに向かい合って椅子に腰掛ける。

小さなカゴに入った飴を口に頬張り、拉致されてからのことを振り返った。

魔王の前では無力な自分が虚しくて仕方ない。

瞬輝は、力無い自分を呪った。

「ホントのホントに丸腰だな、俺たち」

「嗚呼、とてもイイ腰だぞ、煌輝たん（ハアハアハアハア）」

びくうっ!!

「きゅっうっうん……」

突然現れたトラウマ（魔王）に腰を撫でられたショックで煌輝が気を失ってしまった。

座っていた椅子からフラフラ崩れ落ち、それを魔王が抱き止める。瞬輝はその場から動けなかった。

「ふはは、いいぞ煌輝たん……！今日も綺麗だ」

女の子に向けてだったら喜ばれるであろう言葉は、男に向けて放たれると不快でしかない。

しかも、煌輝は自分と同じ顔なのだから、抱き止められているのは自分なのでは、と錯覚までしてしまう。

「……さあ、着替えよう煌輝たん」

「おい、止める！」

煌輝を脱がしにかかる魔王に、瞬輝が叫んだ。

「瞬輝たんと同じ服を用意させた。ぜひ二人で着てくれ」

「見分けつかなくなるぞ」

確かに、魔王の持ってきたのであろう服は瞬輝のものと同じだった。魔王は随分ご機嫌なようだ。

「間違える訳がないだろう。夫婦なのだから」

（夫婦じゃねーよ！勝手に決めるなばーかばーか！）

「俺が着替えさせるよ。他人にさせるのは煌輝も嫌だろうし」

「他人ではないぞ、夫f「夫婦じゃねーよ！！」」

これは想像以上に早く逃げなければいけないようだ。
次の日の朝早くに、二人はまたセーベルの元を訪ねた。

「そういう訳なんだ。出来るだけ早く逃げたい。手伝ってほしい」

「ふむ、なるほど……」

たこ焼を頬張りながら考え込む彼女の応えを待った。
ちなみに双子で同じ服を着てみた。

セーベルが口を開く。

「やっぱり瞬輝は細胞分れて」「双子です」

「冗談だ。わかった、良いだろう。成功するかはわからないが、全力を尽くそう」

「やった……！」

「ありがとうございます！」

「ラーメン奢れよ」

なんとか協力者を得た。

確かに強力な助っ人だが、城からの脱出が出来るかはわからない。
成功の可能性としては低いだろう。

VS 魔王（対騎士戦03）

「8万……で、いかがでしょうか？お安くなってますよ」

「いや、高い。この程度の性能で8万は詐欺だろ」

「こつちがせつかくオートマチックで勘弁してやってんだから」

「しかしですね……」

城内にある商いギルドの屋台で装備品を備える。

奪われた薬や銃程ではないが、そこそこな物を揃えることができた。

現在は武器屋にて銃の値引き交渉中だ。

双子VS売り手の地味ながら三者にとってはこの上無いほど重要な戦いが卓上で繰り広げられている。

「おい、まだか……」

先程買ってきた袋一杯に入っていたオニギリを平らげようとしているセーベルが双子を急かす。

「待ってください。収入不安定な仕事していると出費には厳しい審査が……」

「定職に就け」

「ごもつとも。」

「まだ若いんだから、どこでも雇ってもらえるだろ……?」

「何言ってるんですか、俺たちもう27ですよ」

商談が成立したようで財布から現金を取り出す瞬輝が溜め息混じりに言った。

「冗談だろ?」

「嘘言ってもどうしようもないし、な」

「な。魔王に付け入る時は18って言ったけど」

10歳サバをよむ勇者、ここに在り。

「もともとうちの国って、他の国の人たちより童顔に見られるし」

「さらに、うちの家系が恐ろしく童顔なものもあって」

新しい銃の感触を確かめる様に、構えたり回したりしながら腰のホルダーに納める。

「準備完了。じゃあ、お願いします、セーベルさん」

「……………27でDT」

ぼそり。

「今、何て……？」

「いや、何も。それより地図だ。もう一度確認するぞ」

煌輝が地図を広げる。

現在地を確認すると、ここは魔王城の中央棟。つまり、城の真ん中だ（文字通り）。

魔王城は中央棟、西棟、東棟、それから少し離れて北棟で構成されている。それぞれ数本の渡り廊下で繋がっている。

今居るのは、中央棟の東棟へ繋がる渡り廊下付近の階段踊り場。

人通りが多いわけではないが、全く無いという程でもない。

「正直、この城から脱出するのは簡単だ。だが、その後だろうか？」

「魔王は、必ず追ってくる。そして連れ戻される……」

踊り場で地図を中心に座り込む。

邪魔極まらない。

通行人に嫌な目で見られたり、二度見されても気にしない強靱な精神だ（ただの自己中ともいう）。

「男二人を守りながら逃げ切れるとは思えん。いくら書記官だからといってあまり期待するなよ。そこで、だ」

ガサガサと紙を取り出すセーベル。

「……これは？」

「魔王との契約破棄の書類だ。サインをしる。魔王のサインは奴が寝惚けている時に書かせた」

魔王チヨ口いな!!!

「それから、帝国の国籍申請書」

「いや、俺たちは……」

「国籍が無いから魔王は好き勝手できるんだぞ！？仕事はこつちで見付けてやる、特別にだ！」

「まあ、確かに無国籍なんだけど……」

フラフラ旅薬師医師業をするには国籍は邪魔なだけで……。いつかはどこかの国の公務員になりたいとは思っていた。しかし、それとは何か違う気がしてならなかった。

が、まあいいか。

魔王の魔の手（文字通り）から逃れられる上に八口ワに行かずとも定職が見付かるなんて、一石二鳥だ。

「出てすぐ、もう一人と合流する。連絡して応援を頼んだ」

「えっと……？」

「安心しろ、男だがそっち系ではない」

そんなことは心配していない。

瞬輝と煌輝は一瞬目眩を感じた。

（心配で仕方がないのは俺だけか……？）

VS 魔王（対騎士戦04）

「応援を呼んでくれてるっていつてたけど……！」

「どこに居るんだよ……！」

危うい。どうするか。

セーベルとはぐれました。

「くっそ！この役立た図！」

「くそとか主人公が言わない！それから地図に八つ当たらない！」

はぐれてから、地図をたよりに駆けずり回って見たが、段差につま
ずくばかりでなんの進展も無かった。

そればかりか、騒いだおかげで魔族の輩やからに脱走作戦がバレたようで、
先程から足音が追いかけて来る。

「……っ！もうバレたんだ、正面突破しよう、煌輝……！」

「さすがに正面は捕まる！それに扉は二人じゃ開けられない……！」

最近気付いたんだが、何も無い所でつまづくのは内股なせいらしい。

自分の足につまづくんだと（友人T田に聞いた）。

「もうやだ。やってらんない……」

「はぁ……疲れた」

いつの間にか、城の外にいた。

死に物狂いで逃げていたらつまづいて窓から落ちた。
無事なのはRPGクオリティだ。

「なんでこんな（魔王による重度のセクハラからひたすら逃げる）
ことやってんだろうな……一年以上も」

「俺巻き込まれただけ」

「双子だろ。運命くらい共にしろ」

岩影に隠れて愚痴りだす。

「こんな所に居たのか。探したぞ。中華そば追加な」

「「あ、せーべるさん……」」

「あれ、合流してないのか？」

「はぁ、まあ……」

岩影に三人で三角座りする。

「おかしいな。迷子になるようなキャラじゃないんだが」

おもむろに懐ふところからケータイを取り出す。

「連絡するか」

「あの、世界観的にケータイは……」

「緊急事態だろ、目をつぶれ」

「申し訳ない。時間を1時間間違えていたようだ」

しばらくして現れたのは白い服を纏まとった男の人だった。

長身とは言えないが、小さくもない。

暗くてよくわからないが、髪の色は緑だろうか？瞳の色はわからない。

「時間があると思っただ中を散策していた」

爽やか笑顔が眩しい……！

やってた事はドジっ子だが、キラッキラじゃないか。王子さまか、王子さまなのか！？

「別にときめかねーけどな！」

自分に思わずつつむ。

「？」

つい口に出してしまった（テヘペロ）。

「ぼくはフライハイト・シュトルツ・ゲーゲンヴァルト」

「長い！そして噛みそう！」

「そうかな。好きに呼んでくれて構わないよ」

一通り自己紹介し終わると、セーベルが急かすように地図を取り出した。

「ここがバレるのも時間の問題だ。さっさと帝国領に逃げるぞ」

「体力とか足の速さとか、自信無いんだけど……」

体力は女子高生並みだと考えてもらえると分かりやすい。

「いざというときは私達が護ってやる。安心しろ」
男前だ。

VS 魔王（対騎士戦05）

「はあ、はあ、待って……！ちよ、ホント……無理！」

「男だろ、しっかりしろ！」

「いや、ただの医者だし！」

「ははは！少し休もうか」

「フライハイトさんマジ優しい！」

現在魔王城より逃走中。

魔王城からの距離、約600メートル。

「女子高生か……！」

さつきからセーベルに叩かれている。

「仕方ないだろ！普段鍛えてるわけじゃないし！」

「たわけ！」

「へえ、お医者さんだけど賞金稼いでいるのか」

「まあそんなところです」

追っ手が見えないことを確認して、手頃な岩の上で休憩をする。
どこから出したのか、温かいお茶をフライハイトから受け取り、一
息入れた。

これまでの経緯をおおよそ説明すると、フライハイトはなにやら考
え始めた。

「こづいうのはどつだろづ？」

「「と、言いますと？」

「魔王と結婚してみる」

「マジMURIE1000%!!」

「てか話聞いてました!？」

「すまない、半分寝ていた」

人を外見だけで中身を判別することは難しい。

「コイツに長話しても無駄だぞ。それより、そろそろ出発するぞ」
セーベルは靴底を鳴らして3人を急かした。

重い腰を上げ、軽く屈伸した後行く先を見据えた。
薄暗く、先の見えない道（と言つには無理がある）が続いている。

「追っ手に追い付かれる、抱いてやるから来い！」

「えっ？」

きゅんっ

「そういう意味じゃない！」

「おんぶじゃダメですか？」

「後ろから攻撃されたらひとたまりもないだろう」

まあ、その通りだが。

男として女性（自分の倍は男らしいが）に抱っこされるのは、とんだ恥である。

「山の中だし、私たちしか見ていない……ああ、あと（私たちが走れば）そんなに距離無いから」

「私が2人持とうかい？」

「俺たちを荷物みたいに扱わないでください！」

結局、時間も時間なので（一話の尺もアレなので）、大人しく（大人げないが）フライハイトに2人とも持ってもらうことに。

お陰でフライハイトは両手がふさがってしまった。

それにしても凄い筋力だ。

ちなみに双子の体重は非公開だ。

V S 魔王（対騎士戦06）

「ところで瞬輝、煌輝、なぜラヴィリンソス（魔王）が追ってこないのか、分かっているか？」

「そつえば……真つ先に追ってきそうなのに」

両腕に双子を抱き抱えたフライハイトの隣を走るセーベルが呆れた視線を送る。

「確かに、部屋に忍び込んだときは留守だったような……」

「え？フライハイトさん忍び込んだんですか？」

「ああ、魔王城の地図攻略がてら。引き出しから飴盗ん………いただいてきたよ」

「実は今ヤツ（魔王）はこの帝国、しかもアフトラトリア城の中だ」

「なん…だと!？」

アフトラトリア城、つまり今自分たちが向かっている帝国の城だった。

「ラヴィリンソスは公的な訪問だ、普通にしていれば遭遇することはないだろう………が、あの魔王だ、油断はならん」

そりゃそうだ。

魔王は驚く程（気持ち悪く）瞬輝に敏感だ。

「ところで、なんで魔王が帝国に？」

「うん、それは私から話そう」

両腕に成人抱えて息切れ一つしないんですね、双子は抱えられただけで息上がっていますが。

「少し前に、書記官全員に召集がかかった」

「書記官て何人いるんですか？」

左腕の瞬輝が素朴な疑問を口にする。

最近になって「書記官」という人の話を聞いたが、今イメージが浮かばない。

瞬輝たちが出会ったのは、セーベル、フライハイト、仁の3人。

「ええと……今は、10人くらい、かな」

「入れ替わりが激しいからな」

「そう、その約10人に召集がかかった。つまりそろそろ大きな争いがあるかもしれない。それもヴァスターニエ（魔王の治める国）との……」

「きっと、王はラヴィリンソスと直接対談してヴァスターニエとの友好関係を築いてくるか、はたまた…… 宣戦布告、か……」

ああ、きっと勇者一行がストーリーを進めたのだろう。

タイミングが悪い……いや、よかったのか。

どちらにせよ、（実に不本意ではあるがもし万が一億が一奇跡的にも偶然）今度会うことがあったら気が済むまで殴ってやろう。

「仁やらその一派なんかも呼びつけてるあたりをみると宣戦布告だろうな」

「セーベルさん、なぜです？」

セーベルはしばらく黙りこむ。

フライハイトも足を止めることなく静かにそれを見ていた。考えたが、と彼女は口を開いた。

「簡単だ。奴が王の脅威だからだ」

そんなに危険人物だったのか。

浴槽でおたまじゃくし飼ってるのに……。

王の脅威。そう言っているが、セーベルの表情は、変わらなかった。むしろ楽しんでいるようでもあった。

そのまましばらく無言で足を進めた。

「……そろそろ到着する頃だ。セーベル、上着を彼らに」

フライハイトが迫る城を見て言った。
セーベルがそれに応える。

「そうだな、わかった。それと……先程の話だが、ただ単純にぶつかることが多いだけだ。あまり気にするな」

そういうことは勇者が背負う。

2人から上着を受け取る。

きつと書記官の制服だろう。

色違いだが多少人によって形も違うようだ。

「なぜ上着……?」

「気配やおいを多少なりとも遮れるかと思って」

彼女も所詮は体育会系である。

だがしかし、魔王のそういった野生的な感覚が鋭いのも事実である。

さて、アフトクラトリア城が見えてきた。

城の中の事務局に紙を提出して受理してもらっただけなのだが、嫌な予感が走り抜ける。

VS 魔王（対帝国線01）

「ほおうおおおお！でっけええ！！」

「落ち着け、ええと……煌輝」

セーベルが迷いつつも特定する。

フライハイトから降ろされてからも場所を左右で固定し、騎士2人が分かりやすいよう工夫したのだが。しかも2人の上着は色も形も違う。

まだ迷うか。

流石脳ミソまで筋肉でできているだけある。

眼前に聳^{そび}える堅牢な大城「アフトラトリア城」。

大国に相応しい堂々たる風格に、思わず気圧される。

まあ、裏口からこっそりお邪魔するのだが。

「お邪魔しまーす……」

裏口といっても、自分たちが暮らすような民家の裏口とは桁外れに
イイ造りだ。

「うちの玄関よりイイ造りだ」

「お城と一般住宅を比べるのは無理があるんじゃないかな？」

城の中に入り、廊下の光りを浴びてキラキラと緑の髪を揺らす王子様、もといフライハイト・シュトルツ・ゲーゲンヴァルト氏。

（よし、やっと覚えた……！）

明るくなったところで改めて彼をジロジロ観察（失礼極まりないが）してみた。

それでも爽やかな笑顔をくれる彼は根っからのいい人なのだろう。

暗くてわからなかった瞳は、彼の心を表すようにキレイな^{すみれいろ}董色だった。

「順調に行きすぎて怖い……」

あまりにも順調に進みすぎた不安を、思わず溢してしまった。

あとの作業といえば、提出した書類のサインくらいだ。

今は書類を事務処理してもらっているため、ベンチに座って終わるのを待っている状態だ。

「確かに、あのラヴィリンソスに限って何も仕掛けて来ないのが気持ち悪いな……」

隣でセーベルがもきゅもきゅ、どこで手に入れたのか大判焼き（小倉餡たっぷり）を口に入れていた。

大きな袋に一体いくつ入っているのだろう。

一つ瞬輝に差し出す。

「食うか？」

「いや、今ダイエット中なんで……」

「女子か！」

ステキな男性みたいな貴女に言われたくありません。

「戸籍の変更、承りました。書類内容をご確認いただけましたらコチラにサインをお願い致します」

受け付けの可愛いお姉さん（年下だと思っが）に渡された書類に目を通す。

（……よし！）

と、ペンを取りサインをしようとした時だった。

「瞬輝さんと煌輝たん！！」

ビクウウウツッ！！

「ぜ、ゼス……！！」

遠くで聞きたくない声ランキング第二位、勇者ゼスの声が聞こえた。

しかも近付いて来るのが分かる。

冷や汗と心拍が異常値を示す。

危険メーターの針が振り切った。

心の平穩度計測器の数字がエラー表示される。

瞬輝の全身が危険を感じ取っていた。

隣にいる煌輝も同じだろう。

なんと言っことだ。

魔王だけでなく、勇者もこのアフトラトリア城に来ていたのだ。

幸いにも、ここに来たのがゼスだったため、サインを邪魔してくるようなことはなかった。

熱い視線が邪魔だったのは否定しないが。

「みんな無事で良かったよ」

「申し訳なくてみんなに合うの嫌だったけど、みんな元気そうで何よりだな」

双子とパーティ（ゼス除く）が再会を心から喜んでいた。

魔王の攻撃は幸いにも直撃はせず、吹っ飛び、落ちた先が湖だった
そうで、怪我はほとんど無かったようだ。

「ああ、そうだと忘れるところだった」

アルデバランがそう言うと、道具入れを漁りだした。

「そちらの2人に……」

スタンプカード。

「……」

スタンプカード制度を発案した人を心から呪った。

しかもセーベル、フライハイトともにこやかにソレに応えるあたりプロだった。

アルデバランは一体何故スタンプを集めているのか。
きつと成り行きなのだろう、そう自分に言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2622/>

VS 魔王

2011年11月30日23時53分発行